原著論文

佐渡の産業遺産と産業博物館

－ 石見銀山との比較から －

武田 竜弥

名古屋工業大学大学院工学研究科

Industrial Heritage and Museums in Sado

－ In Comparison with Iwami-Ginzan Silver Mine －

Tatsuya TAKEDA

Graduate School of Engineering, Nagoya Institute of Technology, Gokiso-cho, Showa-ku, Nagoya-shi, Japan

Abstract : *Sado* Mine was one of the biggest gold and silver mining sites in Japan. Since the late 16th century when deposits were first discovered, mining in *Sado* continued for about 400 years. Especially during the *Meiji* Period western technology was introduced there before the rest of the country. This played an important role in the modernization of Japan's mining technology and can be regarded as a treasure house of industrial heritage. But strangely, *Sado* Mine does not attract so much attention as *Iwami* Silver Mine, which was registered as a World Heritage Site (UNESCO) in 2007, and visitors are not so many. Why has this happened? To answer this question, we researched the actual conditions of industrial heritage and museums in *Sado* and *Iwami*. In this paper, based on the results of research, we clarify the problems of *Sado* Mine for visitors by comparison with *Iwami* Silver Mine and propose the plans to develop industrial tourism in *Sado*.

Keywords : *Industrial Heritage, Industrial Museum, Industrial Tourism*

1. はじめに

今日、わが国では校外学習や生涯学習などの見地から博物館の意義が見直され、博物館学への期待が高まっている[1-4]. 科学研究費補助金の時限付き細目(2007～2008年度)に「博物館学」が加えられたのも、こうした動向を踏まえていることといえる。

博物館にはさまざまな種類があり、博物館学の課題も多岐にわたるが、中でも筆者が関心を寄せているのが、産業博物館である[5]. 1990年に文化庁が「近代化遺産総合調査」を開始して以来、わが国でも近代の産業遺産が文化財として認知されるようになった。1996年には文化財保護法に登録文化財制度が導入され、産業遺産の保護を推進する制度的基盤が一層整えられた。こうした動きが2003年以降、国の観光立国政策[注1]と結びつき、産業文化財を観光対象とする「産業観光」が大きな注目を集めるようになった[6,7]. 普遍的な科学技術とは異なり、それを用いる産業やその発展形態は地域によってさまざまな姿を取る。産業観光とはこの地域性に着目した新たな観光のあり方であり[8], そこにおいて中心的な役割を果たす施設こそ、産業博物館に他ならないのである。

筆者は先行論文[9]において、地域性に優れた産業博物館の研究が、産業という切り口から見えてくる地域社会の営

みとそこで育まれた感性との関わりにアプローチするという点で、感性社会学[10,11]のテーマとしても有効であることを示すとともに、独自の全国調査の結果に基づいて、わが国の産業博物館の現状と課題を全般的な見地から明らかにした。そしてその際、当該論文で言及することのできなかった個々の地域や博物館の事情に即した問題点の解明とその解決策の提示を今後の課題として挙げておいた。本稿ではこれを受けて、いわば産業博物館と産業観光に関する事例研究の一つとして、佐渡を取り上げることにしたい。

佐渡に注目した理由は、第一に、佐渡がわが国でも有数の産業遺産の宝庫であること、第二に、それにもかかわらず佐渡においてははまだ産業観光が十分に発展していないことによる[12]. ここで比較の対象として取り上げたいのが、島根県の石見銀山である。周知のように、石見銀山は2007年に登録名「石見銀山遺跡とその文化的景観」としてユネスコの世界遺産に登録され、以来わが国における産業観光の一大拠点へと成長してきた。県の観光動態調査[13]によれば、石見銀山の2007年の観光客数は前年に比べ78.4%の増加(71万4千人)、有料施設の龍源寺間歩だけを取ると、実に3.8倍もの増加(36万3千人)となったという(表1)。

後述するように、石見銀山と佐渡鉱山[注2]は当初よく似た発展経緯を辿った。また鉱山遺跡だけあってアクセスがあまりよくない(しかも冬季は大雪に見舞われる)という点でも、両者はほぼ同じ条件である。にもかかわらず、一方は

世界遺産に登録され、多くの観光客を引きつけているのに対して、他方は豊富な産業遺産を持ちながら、それを十分に生かしきれていない状態にある。この違いは一体、何に由来するのであろうか。

この疑問を解くため、筆者は佐渡と石見の産業遺産と産業博物館について実態調査を試みた。調査期間は、佐渡が2008年7月31日から8月4日までの5日間、石見が同年9月10日から11日までの2日間である。本稿ではまずこの調査結果をもとに、佐渡鉱山の産業遺産と産業博物館の現状を石見銀山のそれと比較して問題点を検証する。次にそれを受けて、佐渡に残る鉱山以外の産業遺産にも着目しながら、佐渡の産業観光の活性化に向けた提言を取りまとめる〔注3〕。

2. 石見銀山と佐渡鉱山の歴史

最初に、石見銀山と佐渡鉱山の歴史を振り返り、それぞれに残された産業遺産の時代的特徴を確認しておきたい。

石見銀山が発見されたのは、戦国時代の半ば、16世紀初頭のことである〔14〕。1526年、博多の商人神屋寿禎が出雲の鷲銅山の銅山主三島清右衛門らと仙ノ山(銀峯山)に登り、銀の採掘に着手したのが、その始まりと伝えられる。当初、石見の銀は鉱石のまま朝鮮半島に送られていたが、選別の手間や輸送上の効率の悪さなどから、寿禎は1533年に宗丹、慶寿という二人の技術者を招き、現地での精錬を開始した。このとき導入されたのが、灰の上で銀と鉛を吹き分ける「灰吹法」という精錬方法である。灰吹法はその後、鶴子銀山や生野銀山などにも伝えられ、日本の産銀量を飛躍的に増大させた。17世紀初頭には日本の銀輸出力は年間200tにも達し、世界の産銀量のおよそ3分の1を占めた。中でも石見銀山は日本の銀生産の5分の1をまかない、質・量ともに国内屈指の鉱山として繁栄した。

開発当初の石見銀山は、山口に本拠を置く大内氏の支配下にあったが、戦国時代の争乱の中、尼子氏、毛利氏と支配者が変わり、関ヶ原の戦い以降は徳川氏の直轄地となった。徳川家康は1601年に大久保長安を石見銀山領の初代奉行に任命、長安は新たな間歩(坑道)の開発や経営の合理化などに手腕を発揮し、石見銀は成立したばかりの幕府の財政に大きく寄与した。しかし1620年代になると、石見では早くも産

銀量が低下し始め、幕末期にはほとんど産出しなくなった。その後明治に入って大阪の藤田組(現・DOWAホールディングス)が近代的な製錬所を建設するなど再開発を試みたが、思うような成果は上がらず、1922年、石見銀山は休山するにいたった。

一方、古くから砂金の採取が行われていた佐渡では、石見から遅れること15年余り、1542年に越後の商人外山茂右衛門によって鶴子銀山が発見され、銀の採掘が本格化することとなった〔15〕。1589年には上杉景勝が佐渡を攻略、鶴子に陣屋を設置し、採掘された銀の一部は豊臣秀吉にも献上された。しかし関ヶ原の戦いの結果、上杉氏は減封となり、以後は佐渡も徳川氏の直轄地に組み入れられた。

1601年、相川で新たに金銀鉱脈が発見されると、家康は佐渡の経営に本腰を入れ、石見奉行であった大久保長安に佐渡代官を兼任させた。長安は1604年に佐渡に渡り、陣屋(のちの奉行所)を鶴子から相川に移して計画的な町づくりを進めるとともに、金銀の搬出や物資の搬入のための街道や港を整備した。佐渡鉱山の最盛期は1610～30年代であるが、その後も金銀が枯渇してしまうことはなく、精力的に採掘が続けられた。1840年にはのちに幕府の勘定奉行、外国奉行として活躍する川路聖謨が佐渡奉行に就任している。

明治に入ると、佐渡鉱山は官営の鉱山として再開発されることになり、1877年には日本で最初の洋式堅坑となる大立堅坑が完成した。また1885年には、釜石で日本初の洋式高炉による製鉄に成功した大島高任が鉱山長に就任、高任は新たな堅坑を開削したほか、近代的な選鉱場の新設や大間港の整備などにも力を尽くした。当時の佐渡の金産出量は全国のおよそ36%を占めたというから、文字通り日本一の金山だったのである〔16〕。その後、佐渡鉱山は宮内省御料局の所管を経て1896年に三菱合資会社に払い下げられ、1989年まで金の生産が続けられた。ちなみに釜石製鉄所の高炉の火が消えたのも同じ1989年であるから、この年には大島高任ゆかりの鉱山施設がともに終止符を打ったことになる。明治以来進められてきた日本の近代化が、昭和の終わりとともに一つの区切りを迎えたといえよう。

さて以上見てきたように、石見と佐渡は当初とてもよく似た発展経緯を辿った。銀山が発見されたのもほぼ同時期であり、関ヶ原の戦い以降徳川氏の直轄地になったという点も、大久保長安が鉱山の発展に大きく貢献したという点も同じである。両者の違いは、佐渡では銀だけでなく金も産出したこと、最盛期が過ぎてからも金銀が枯渇してしまうことがなかったことにある。このことは、それぞれに残された産業遺産の違いにも反映されている。石見銀山は、開山から100年ほどでほとんど銀を掘り尽くしてしまい、1675年には奉行統治が代官統治に格下げ、明治に入って藤田組が再開発を試みるも採算が合わず、大正時代には休山するにいたった。つまり鉱山遺跡として見るならば、石見銀山の主要な遺跡はそのほとんどが江戸時代前半までのものなのである。

これに対して佐渡では、1618年に代官が奉行に格上げされて以来、一貫してその地位を保ち、明治以降も政府や三菱

表1 佐渡と石見の観光客数の推移(単位:人)

	佐渡	石見銀山	龍源寺間歩
2001年	828,000	300,000	34,701
2002年	779,000	290,000	36,464
2003年	736,000	310,000	40,279
2004年	658,000	318,000	42,652
2005年	671,000	340,000	56,567
2006年	653,000	400,000	95,260
2007年	605,700	713,700	363,152
2008年	596,000	813,200	363,814

(新潟県・島根県の観光動態調査により作成)

の手で大規模な開発が続けられた。そのため、佐渡には江戸時代の遺跡ばかりでなく、明治から昭和にかけての近代化遺産も数多く残されることになった。いわば、石見にないものが佐渡にはあるのである。

3. 佐渡鉱山の産業遺産

それでは次に、佐渡鉱山にどのような産業遺産が残されているか、その代表例を具体的に見ていくことにしよう。

1989年まで操業が続けられた佐渡鉱山は、現在、三菱系列の株式会社ゴールデン佐渡が経営する「史跡佐渡金山」という名の産業観光施設となっている。佐渡鉱山の主な産業遺産はこの施設で見学することができるが、それ以外にも佐渡奉行所跡、御料局佐渡支所跡などの遺産がある。

大久保長安が基礎を築いた佐渡奉行所は、江戸時代を通じて5回焼失したが、そのたびに規模を変えて再建され、移転することはなかった。最後の奉行所（1859年建設）は1943年に焼失し、これにより江戸時代の建物はすべて失われた。しかし1994年、その跡地が「佐渡金山遺跡」の一つとして国の史跡に指定されたのを機に発掘調査が行われ、それに基づいて最後の奉行所の御役所と寄勝場の一部が復元された。施設は2001年から一般公開されており、寄勝場は展示棟として利用されている（図1）。

御料局佐渡支所は、1889年に佐渡鉱山が皇室財産として宮内省御料局の所管となった際に、管理事務所として設けられたものである。建物は当時のままで、屋根瓦には菊の紋がついている。現在は相川郷土博物館として使われ、鉱山関連の展示が行われている（図2）。

次に佐渡鉱山の主要観光施設「史跡佐渡金山」であるが、

こちらは鉱山のほぼ中央部、佐渡奉行所や御料局佐渡支所からは2kmほど離れたところにある。入口付近からは、露天掘りのため山が二つに割れた「道遊の割戸」が見える（図3、図4）。施設には、江戸時代の坑道と付属の鉱山資料館を見学する「宗太夫坑コース」、明治時代に開削された運搬坑道と機械工場を巡る「道遊坑コース」、明治から昭和にかけての産業遺産を回る「産業遺産散策コース」の3種類が用意されている（すべて別料金）。

宗太夫坑は、江戸初期から開発された富鉱「青盤脈」の採掘跡で、斜坑は海面下に達する。江戸時代の金山坑道としては国内屈指の規模を誇り、国の史跡にも指定されている。坑内には金の採掘、排水、保坑、測量など作業別に実物大のジオラマが設けられており、江戸時代の坑内作業の様子がよくわかる（図5）。またこのコースには、鉱山資料館が併設されている。ここでは、金鉱石が小判になるまでの過程が当時の鉱山町の生活振りなどとともに模型によって詳しく紹介されているほか、佐渡の金鉱脈の成り立ちや1696年に完成した南沢疎水坑道の仕組みなどが解説されている。

道遊坑は、1899年に佐渡鉱山の主要鉱脈「道遊脈」を開発するために開削された運搬坑道で、鉱山が操業停止となる1989年まで使われた（図6）。内部は鉱山の各主要坑道とつながっており、トロッコによって鉱石が運ばれた。石見では見られない産業遺産であり、2008年には後述の大立堅坑関連の施設などとともに国の登録有形文化財となった。また坑道の外には当時の機械工場がそのままの形で保存され、中ではここで実際に使われた機械類が展示されている（図7）。

最後の産業遺産散策コースは、明治から昭和にかけて使われた近代化遺産をガイド付きのバスで巡るものである。鉱石が金になるまでには、大きく分けて採掘、破碎・選鉱、製錬

図1 佐渡奉行所

図2 相川郷土博物館

図3 史跡佐渡金山入口

図4 道遊の割戸

図5 宗太夫坑

図6 道遊坑

という3つの工程があるが、このコースではそのいずれに関しても貴重な遺産を見学することができる。

採掘関連では、1877年にドイツ人技術者アドルフ・レーの指導により完成した大立堅坑が見ものである（図8）。坑道の深さは152mにも及び、蒸気機関（1911年以降は電動機）によって物資や鉱石を引き上げる仕組みとなっていた。内部には、当時使われた捲揚機と空気圧縮機が保存されている。

破碎施設については、1891年に完成した間ノ山搗鉱場の遺構と1938年に政府の重要鉱産物増産法に伴って建設された破碎場がある（図9、図10）。掘り出された鉱石は、鉱車や架空索道（ロープウエー）でこれらの施設に運ばれ、製錬に適した大きさまで破碎された。破碎場の西側には、砕かれた鉱石を貯蔵していた貯鉱舎（1938年建設）も残されている。

鉱石から金を取り出す製錬所は、鉱山の麓、御料局佐渡支所跡のある北沢地区に置かれていた。残念ながら製錬所の建物は現存しないが、1938年に建設された浮遊選鉱場（月産7万トンの鉱石処理が可能で、当時東洋一の規模といわれた）の遺構と1907年建設の火力発電所電機室棟が見学できるようになっている（図11、図12）。北沢地区にはこのほか、佐渡で唯一現存する50mシッケナーやインクラインの遺構などがある。なお、これらの遺産はすべてゴールデン佐渡の管理下にあるが、外観だけならツアーに参加しなくても見学が可能である。

4. 石見銀山と佐渡鉱山の違い

さて以上確認したように、鉱山遺跡という点からは、佐渡は石見よりもはるかに射程の広い産業遺産を持っている。石見銀山の主要な遺跡が江戸時代前半までのものに集中してい

るのに対して、佐渡には豊富な近代化遺産が残されているのである。ではそれにもかかわらず、なぜ佐渡では石見ほど産業観光が活性化していないのであろうか。

その理由としてまず考えられるのは、石見銀山が世界遺産に登録されたことであろう。たしかにこれにより石見は世界的な注目を浴び、連日に及ぶ報道は観光客増への大きな呼び水となった。だがここで注意しなければならないのは、世界遺産への登録は直ちに観光客の増加に結びつくわけではないということである。実際、澤村明が指摘しているように、世界遺産への登録後に観光客が急増したという例は、わが国にはほとんどない[17]。石見は岐阜県白川郷などとともに、その数少ない事例の一つなのである。

重要なのは、世界遺産への登録の際に問われる「客観的な価値」と人々がそこに魅力を感じるか否かという「主観的な価値」とは異なるという点である。なぜなら、当該の地域そのものに魅力がなければ、たとえ一時的に注目を集めたとしても、観光客は定着しないからである。石見が観光客を増やすことに成功した理由は、まさに石見にそれだけの魅力があったからに他ならない。世界遺産への登録は、人々がその魅力を発見するための契機となったにすぎないのである。

産業観光の活性化という面から見た場合の佐渡と石見の違いもまた、まさしくこの点にあるといえる。産業遺産の「客観的な価値」だけを取れば、佐渡は石見に勝るとも劣らない。しかし石見がそれを十分に活用し観光客を増やしているのに対して、佐渡がそれを生かしきれていないとすれば、それは佐渡にその「客観的な価値」を「主観的な価値」に変換する、言い換えるなら、産業遺産の価値を産業観光の魅力（＝感性価値）へと変換する要素が欠けているからなのである。そのあたりの事情を博物館という視点から分析してみよう。

図7 機械工場

図8 大立堅坑

図9 間ノ山搗鉱場跡

図10 破碎場

図11 浮遊選鉱場跡

図12 火力発電所跡

改めて述べるまでもなく、博物館とは、特定の分野において価値があると認められる資料を収集・保管・展示するための施設である。それゆえ博物館においては伝統的に、その目的を達成するのに必要な一定の敷地と建物を持つことが前提とされてきた。いわば箱モノの博物館である。しかしこれに対して1960年代後半、フランスの民俗学者ジョルジュ・アンリ・リヴィエールが「エコミュージアム」（フランス語ではエコミュゼ）というものを提唱した[18]。これは従来型の博物館ばかりでなく、地域の文化財や自然環境、そこに住む人々の生活などを包括して博物館として機能させようとする考え方で、わが国でも1980年代後半から注目を浴びようになってきた。実は佐渡と石見を比較すると、この2つの意味での博物館の整備状況に大きな差があるのである。

まずは従来型の博物館から検討してみよう。筆者は産業関連の博物館・資料館・展示館等を一括して「産業博物館」と呼んでいるが、石見には現在、これに該当する施設が3つある。石見銀山資料館、町並み交流センター、石見銀山世界遺産センターである。

石見銀山資料館は、江戸時代に銀山領を支配した大森代官所の跡地にあり、表門と門長屋（1815年建築）は国の史跡となっている（図13）。また建物には1902年に建てられた旧廻摩郡役所が使用され、中では銀山関連の古文書や道具類、鉱石標本などが展示されている。規模は大きくないが、石見銀山の概要を知るには打ってつけの施設である。

町並み交流センターは、この石見銀山資料館から徒歩で10分ほどのところにある。建物は1890年建築の旧大森区裁判所で、中では当時の法廷の様子が再現されているほか、銀山関連のビデオなどが視聴できるようになっている（図14）。これら2館はいずれも大森地区の旧道沿いにあるが、

歴史的建造物がそのまま使われているので、周囲の景観を損なうことなく、建造物そのものの保全にも役立っている。

石見銀山世界遺産センターは、世界遺産への登録後に開設された施設で、2007年10月にガイダンス棟がオープン、翌年10月に展示棟と収蔵体験棟が増設された。観光の中心となる旧道からはやや離れたところにあるが、石見銀山資料館のある大森代官所前との間に路線バスが運行しているほか、約400台収容可能の駐車場も備えているので、見学に不便はない。ガイダンス棟と展示棟では、銀山の歴史や採掘・製錬技術、鉱山町の暮らしなどがパネルや模型、映像によって詳

図15 石見銀山

図13 石見銀山資料館

図14 町並み交流センター

図16 龍源寺間歩

図17 石見の旧道

図18 旧道の自動販売機

図19 清水谷製錬所跡

しく紹介されている。また収蔵体験棟では精錬などの体験学習が可能であり、まさに石見銀山の全貌を知ることのできる施設となっている。

一方、佐渡に目を転じると、こちらにも産業博物館と呼ぶ施設が3つある。佐渡奉行所展示棟、相川郷土博物館、そして「史跡佐渡金山」内の鉱山資料館である。しかしその展示内容や設置形態を石見のそれと比較すると、佐渡は大きく後れを取っているといわざるをえない。

たとえば佐渡奉行所であるが、ここでは復元された寄勝場が展示棟として利用されている。しかしその内容はかつてここで行われた金鉱石の選鉱工程に関するものには限られており、鉱山の全体像を見渡すことは難しい。また鉱山資料館はそもそも「史跡佐渡金山」の附属資料館なので、この施設の「宗太夫坑コース」に参加しなければ見学することができないし、展示内容もこのコースがテーマとする江戸時代のものに特化している。唯一、相川郷土博物館のみが、建物に歴史的建造物を使っている点、展示が鉱山全般に及ぶ点で石見鉱山資料館に似ているが、残念ながらその展示は洗練されているとはいえない[注4]。つまり、佐渡には観光の拠点となりうるような産業博物館が存在しないのである。

先に指摘したように、佐渡鉱山の歴史は石見鉱山よりも長く、残された産業遺産も膨大である。それゆえ、予備知識の少ない一般の観光客がその全体像を把握するには、拠点となる産業博物館がぜひとも必要となる。にもかかわらず、佐渡には現在までのところ、それに値する施設がない。これは産業観光の振興という面から見て、大きなマイナス要因といわざるをえない。

では、従来型の博物館に難があるとしたら、エコミュージアムという点からはどうであろうか。次にこの点について、石見と佐渡を比較してみることにしよう。

まず石見であるが、石見銀山の主たる観光区域は、かつて鉱山町のあった大森地区と銀の採掘が行われた銀山地区の2つからなる(図15)。両者の境には観光案内所を併設した銀山公園があり、石見鉱山資料館と世界遺産センターを結ぶ路線バス(新道を通る)はここを経由する。

大森地区と銀山地区の間には旧道が通じており、その両端に石見鉱山資料館と龍源寺間歩(見学可能な江戸時代の坑道、図16)がある。観光客の大半はこの旧道を徒歩で移動することになるが、ここには近世の鉱山町の佇まいを伝える伝統的な家屋や町並みが良好な状態で残されている(図17)。大森町ではこの景観を守るため、古い家屋を修復する際には町から補助金を出すなどして、可能なかぎり元の形状を維持もしくは復元するよう努めている。また自治体だけでなく、地元住民もこの景観保持に一役買っており、たとえば大森町の有力商家であった熊谷家の旧宅(重要文化財)の修復・保全には、地元の主婦たちのグループが参加している。さらに一般の家屋だけでなく、自動販売機や店舗などにも景観保持のための工夫が見られ(図18)、いわばこの町並みそのものが生活文化財として大きな価値を有している。

この旧道とともに観光客の移動線として重要な役割を果た

しているのが、銀山公園と龍源寺間歩の手前とを結ぶ遊歩道である。こちらは自然に親しみながら石見の旧跡を巡ることのできるコースで、途中には藤田組が1895年に建設した清水谷製錬所の遺構も見られる(図19)。石見に残る数少ない近代化遺産の一つである。この遊歩道が整備されたおかげで、銀山公園と龍源寺間歩との間は往路と復路で別の道を辿ることが可能となり、石見の魅力をより重層的に味わえるようになった。

以上のように、石見においては地元の自治体や住民の積極的な関与のもと、産業遺産と伝統的な町並みと自然が一体化した観光空間が作り上げられている。大原一興はエコミュージアムの特徴を、①博物館活動、②地域内遺産の現地保全、③住民参加、の3点にまとめているが[19]、石見はそのいずれの条件も満たしているのである。

これに対して佐渡の方はどうかというと、現状ではこちらの面でも佐渡は石見の後塵を拝しているように思われる。大久保長安が基礎を築いただけあって、町の骨格はよく似ているのだが、その保存状況などが石見とは大きく異なるのである。これには歴史的な経緯が関わっている。

もともと江戸初期に相川に開かれた鉱山町は、道遊の割戸の南側の山中、上相川と呼ばれるところにあった(図20)。1603年に佐渡代官となった大久保長安は、物資の搬入を行う港(大間港)を見下ろす台地に陣屋(奉行所)を築き、この陣屋と上相川を結ぶ街道(旧道)を整備して鉱山の支配を行うこととした。石見の例でいえば、上相川が銀山地区、陣屋周辺の旧道沿いが大森地区にあたることになる。ところがこの上相川は、産金量の減少とともに江戸後期には衰退してしまい、明治以降の開発はその西側の新道沿いで進められた。現在の上相川は、人家もない藪の中の廃墟で、遊歩道の整備も進んでいないので、一般の観光客は容易に近づくことすらできない。つまり佐渡においては、その発祥の地となる

図20 佐渡鉱山

鉾山町がそもそも観光ルートから外れているのである。

また残された旧道沿いを見ても、その様相は石見とは大きく異なる。たしかに町の骨格は当時のままだし、京町や大工町など往時を偲ばせる地名も残ってはいるが、伝統的な家屋や町並みを保存する取り組みなどが積極的になされてきたわけではないので、一般の生活空間と変わらない状態となっているのである。もちろんこれは、地元住民の意識が石見に比べて低かったということではない。佐渡では近年まで金の生産が行われていたため、それに応じて再開発が行われてきたのである。

このことは、明治以降に開発の中心となった新道沿いを見ると、さらによくわかる。なにしろ1989年まで操業が続けられたのである。主要な道路はすべて大型作業車が通れるように整備・拡張され、邪魔なものは次々とスクラップにされていった。結果として佐渡には豊富な近代化遺産が残されることになったものの、その遺産はあくまで遺産に留まり、現在の地域の生活からは切り離されたものとなってしまった。これでは、住民の主体的な参加のもと地域全体を博物館として機能させるエコミュージアムの考え方は適用できない。

以上の分析から明らかなように、従来型の博物館という点においても、エコミュージアムという点においても、佐渡は石見に大きく水をあけられている。繰り返し述べるが、鉾山遺跡それ自体として見れば、佐渡は石見よりもむしろ優れている。しかし佐渡では、その価値を観光の魅力へと変換する基盤が十分に整えられていないのである。

5. 佐渡の産業観光の活性化に向けて

では、佐渡の産業観光を活性化させるには、いかなる方策が考えられるであろうか。有力な地場産業もなく過疎化が進行している佐渡にとって、観光振興は地元発展の重要な柱である。鉾山関係の産業遺産は、そうした佐渡における最大の観光資源の一つであり、積極的な活用が望まれる。

相川の鉾山跡を軸とした佐渡の産業観光の活性化策を考えた場合、そこには2種類のアプローチの仕方があると思われる。その第一は、佐渡鉾山単体での活性化策、第二は、他の地域の産業遺産と組み合わせた広域での活性化策である。

このうち第一のものについては、前章で指摘した問題点を一つひとつ解決していくことで対応が図られよう。中でも急務なのが、拠点となる産業博物館の整備である。400年近くに及ぶ佐渡鉾山の歴史や残された産業遺産の価値を多くの観光客に知ってもらうには、全体を俯瞰できる博物館の存在が不可欠である。設置場所は、近代化遺産が数多くあり、相川郷土博物館や佐渡奉行所にも隣接する北沢地区が理想であろう。

次に考慮すべきなのが、モデルとなる観光ルートの開発である〔注5〕。図20で示したように、佐渡鉾山の主な観光区域は、①鉾山の麓にあたる北沢地区と佐渡奉行所、②坑道の見学ができる「史跡佐渡金山」とその周辺、③両者の間に位置する旧道と未整備の上相川地区、の3つからなる。但しこ

れらすべてを徒歩で見て回るのは難しいので、一部にバスなどによる移動を含めることになる。具体的には、①を徒歩で見学したのち、佐渡奉行所から②までをバスで移動、帰路は旧道を徒歩で下るというルートが考えられる。ところがここで問題となるのが、バスの本数である。新潟交通佐渡の2009年の時刻表によると、北沢地区（停留所名「相川郷土博物館前」）から佐渡奉行所（同「佐渡版画村」）を経由して「史跡佐渡金山」にいたるバスは、夏季の繁忙期でさえ1日に6本しかない。しかもこのうち「史跡佐渡金山」の見学に間に合う便は4本しかないのである。これでは、観光客が自らの関心に合わせて自由に時間調整をして移動することは不可能である。観光ルートの開発にあたっては、それを支える移動手段の整備にも配慮しなければならない。

さらにエコミュージアムという点から強調したいのが、地元住民の積極的な関与である。すでに述べたように、現在の佐渡鉾山では産業遺産のほとんどがゴールデン佐渡の管理下にあり、産業観光と地域の生活とが必ずしも有機的に結びついていない。このままでは佐渡鉾山の地域としての魅力をより多くの観光客にアピールすることは難しいだろう。重要なのは、そこに住む人々が主体となって地域の遺産を守り育てるという姿勢である。いわば企業の私的財産を地域の共同財産へと転化する工夫が必要なのである。先に挙げた観光ルートにしても、地元の自治体や住民の協力のもと、旧道沿いに伝統的な家屋や町並みを復元したり、上相川の旧鉾山町とそこに通じる遊歩道を整備したりすれば、その魅力はさらに増すであろう。またゴールデン佐渡と佐渡市が連携して、各施設に共通の割引チケットを発行することなども考えられる。こうした点についても、佐渡は石見から多くを学ぶことができるはずである。

第二の、広域での活性化策に関しては、島の南部にある小木・宿根木の産業遺産との組み合わせが有望であろう。小木は、1606年に大久保長安によって番所が設置されて以来、佐渡の金銀の積出港として発展した町である。1672年に河村瑞賢が西廻り航路を開いた際には、全国の主な寄港地8港の中にも選ばれ、明治の半ばに至るまで北前船で賑わった。現在でも小木には、往時を髣髴とさせる町並みが残されているほか、北前船の活躍を紹介する海運資料館などの展示施設がある（図21、図22）。

一方、小木の西隣にあたる宿根木は、北前船の造船・修理に従事した船大工や鍛冶屋などが集積していた村である。最盛期には村全体で20艘以上の和船を所有し、「佐渡の富の3分の1が集まる」といわれるまで繁栄した。宿根木は明治以降ほとんど再開発が行われなかったことから、現在でも往時の家屋や町並みがそのまま残っており、新潟県で唯一、国の重要伝統的建造物群保存地区に指定されている（図23）。また近くには、旧宿根木小学校の校舎を利用した佐渡国小木民俗博物館という施設があり（図24）、国の重要有形民俗文化財にもなっている船大工道具や漁労用具を見学することができる。別館では、1998年に江戸時代の図面に基づいて建造された千石船「白山丸」なども展示されている（図25）。

図21 小木の町並み

図22 海運資料館

図23 宿根木の路地

図24 佐渡國小木民俗博物館

図25 白山丸

図26 佐渡博物館

これら小木・宿根木の産業遺産を相川の鉱山遺跡と組み合わせれば、佐渡の産業文化の特徴や魅力をより強くアピールすることができるだろう。さらに両者の間には、歴史的に相川の金銀山に先行する鶴子銀山、西三川砂金山などの鉱山遺跡が残されているほか、八幡には博物館としては佐渡で唯一財団法人化されている佐渡博物館がある(図26)。これらをうまく連携させることによって、一層の相乗効果も期待できる[注6]。

但しこちらの場合でも、現状ではやはりアクセスの問題が深刻である。佐渡鉱山から宿根木までバスで移動すると、途中で3回も乗り換えをしなければならず、その都度相当の時間待たされることになる[注7]。しかも鶴子銀山、西三川砂金山、佐渡博物館はいずれも乗り換えの停留所とは別の場所にあるので、もしこれらに立ち寄ると、さらに待ち時間が増す結果となる。たしかにタクシーやレンタカーを利用すれば効率的な移動も可能であるが、集客という面からは有効な解決策とはいえないだろう。ではどうすればよいか。

この点で参考になると思われるのが、富山市や鹿児島市の試みである。富山市では通常の路線バスとは別に、市内の代表的な博物館や美術館を巡る無料のバス(富山ミュージアムバス)が運行されている。本数は1日に7本(1時間おき)で、指定の施設の入場料が割引になるという特典もある。また鹿児島市でも、路線バスとは別の市営バス(カゴシマシティビュー)が1日に25本(2ルート)運行されている。こちらはさすがに無料ではないが、乗り降り自由の「1日パスポート」(600円)を購入すれば、計10施設の入場料が割引になる。佐渡でもこのような試みを(せめて夏季の繁忙期だけでも)取り入れれば、観光客の利便性は飛躍的に高まるであろう[注8]。市の予算や既存のタクシー会社・バス会社など

表2 佐渡鉱山と石見銀山の比較評価

	佐渡	石見
産業遺産に関する事項		
a. 規模	○	○
b. 歴史的価値(近世)	○	○
c. 歴史的価値(近代)	○	△
d. 保存状態	○	○
産業観光に関する事項		
a. 産業博物館	×	○
b. 町並み保全	△	○
c. 遊歩道等	△	○
d. 休憩所・売店等	×	○
e. 住民参加	△	○
f. 移動手段	×	○
g. 広報	△	○
h. 近隣の観光資源	○	×

との利害調整もあるので実現には困難が予想されるが、観光を軸とした佐渡の活性化のためには避けては通れない課題である(表2)。

6. おわりに

佐渡市は、2004年3月に既存の島内10市町村が合併して誕生した新しい市である。発足後、佐渡市はさっそく教育委員会内に佐渡金銀山室を設置し、世界遺産登録に向けた施策を開始した。当初、同室は生涯教育課に属していたが、2006年に文化振興課へと移り、2007年には文化振興課そのものが世界遺産・文化振興課へと名称変更された。

この間、佐渡市は2006年の世界遺産暫定リスト記載資産

の公募（文化庁）に対し、新潟県と共同で「金と銀の島、佐渡—鉱山とその文化—」というコンセプトで提案書を提出した。しかしこのときの提案は認められず、2007年7月にはすでに暫定リスト入りを果たしていた石見が「石見銀山遺跡とその文化的景観」として世界遺産に登録されることとなった。これにより佐渡は石見に大きな差をつけられたが、同年12月、佐渡市と新潟県は再び国に提案書を提出し、2008年9月に念願の暫定リスト入りを果たした。合併から4年半を経て、佐渡の世界遺産登録に向けた活動がようやく日の目を見たのである〔注9〕。

ところがここで問題となったのが、世界遺産の登録基準である。ユネスコの基準によれば、世界遺産は同じ国で同一種類のものは1件しか登録できない。したがって石見銀山がすでに世界遺産に登録された以上、佐渡は鉱山遺跡としてはもはや登録が望めない状況に置かれているのである。そのため国は、佐渡の暫定リスト記載を決めた際に、石見との組み合わせによる登録を目指すという方針を打ち出した。しかしこの方法は石見の側にメリットが少ないため、議論が進んでいないのが現状である。つまり、もしこのまま石見の理解が得られず、佐渡が単独で世界遺産登録を目指すとしたら、佐渡は石見とは違った角度からその文化的価値をアピールしていかなければならないのである。

それゆえ暫定リスト入りを果たした現在でも、佐渡の世界遺産登録が実現するか否かは、いまだ予断を許さない状況といえる。ただ、かりに登録が不調に終わったとしても、それをもってこれまでの活動が無意味であったということはできないだろう。なぜなら、これまでの活動の最大の成果は、佐渡の人々が自らの住む地域の文化的価値を再認識する機会を得たことにあるはずだからである。

世界遺産の問題がどのように決着するにしろ、佐渡の文化的価値はいささかも変わらない。次のステップは、そうした価値をいかにして地域の魅力へと変換し、その活性化に役立てるかである。それには、佐渡に何があるかばかりでなく、何が足りないかを真正面から見据える必要がある。本稿ではこの点を踏まえ、単に佐渡の産業遺産の価値を指摘するだけでなく、産業観光を振興するうえで現在の佐渡が抱える問題点を主に博物館という視点から明らかにした。今後これらの問題を解決していくには、合併前の旧市町村の利害や企業の既得権を超えた大胆な調整が必要となろう。佐渡市のリーダーシップに期待したい。

謝 辞

本研究は、科学研究費補助金・基盤研究(C)「日本の産業博物館の現状と課題について」(課題番号20605004)により行われた。助成に感謝申し上げる。

注

- [1] こうした取り組みはもともと経済政策の一環として発想されたものであるが、観光の価値という面から考えた場合、現代社会における感性価値の重要性を示唆するものとして

興味深い。なぜなら、観光とは非日常的な体験や異文化などとの交流を通して生活の質を高める行為であり、そこで重視されるのは、旅行者の感性に基づく主観的価値(感性価値)に他ならないからである。今日、観光が国の重点政策として位置づけられるようになった背景には、一つに、人々の価値観が感性価値の重視へとシフトしてきたことがあると考えられる。

- [2] 佐渡相川の金銀山は、今日では一般に「佐渡金山」の名で親しまれているが、銀本位制であった江戸時代には「佐渡銀山」と呼ばれ、明治以降は「佐渡鉱山」という名が正式名称として用いられた。本稿では混乱を避けるため、原則として相川の金銀山は「佐渡鉱山」で統一し、その他の鉱山については「鶴子銀山」「西三川砂金山」などと表記する。
- [3] 佐渡には産業遺産以外にも、トキ、能舞台、海水浴場などさまざまな観光資源があるが、本稿の趣旨からは外れるので、これらについてはすべて割愛させていただく。
- [4] 佐渡市教育委員会の調べによると、2006年から2008年までの相川郷土博物館の入場者数は、3千8百人、2千8百人、4千9百人であった。この間の佐渡奉行所の入場者数は2万人台で推移しているため、多くの観光客は相川郷土博物館を素通りして佐渡奉行所を訪れているのである。これには展示内容だけでなく、後述の観光ルートや移動手段の問題、さらには自前のHPを持たないといった広報面での問題が考えられる。なお同じ時期の石見銀山資料館の入場者数は、3万8千人、13万2千人、10万5千人であった(島根県観光動態調査)。
- [5] 無論、これまでも観光ルートの開発がなされなかったわけではない。たとえば地元の佐渡観光協会が発行する「まち歩きマップ・相川編」には、同協会の相川支部が主催するガイド付きのコース(佐渡相川ふれあいガイド)が計6種類(自由プランを含む)紹介されている。ただ残念なことに、これらのコースでは「金山コース」と「近代化コース」が分かれているなど、佐渡鉱山の全体像に触れられるようなコース設定がなされていない。また後述するように、こうした地元観光協会の活動と鉱山本体の産業遺産のほとんどを管理するゴールデン佐渡との間にも十分な連携が見られない。
- [6] 2007年に佐渡市と新潟県が国に提出した「世界遺産暫定一覧表記載資産候補提案書」(後述)には、これらも資産として盛り込まれているが(佐渡博物館を除く)、提案書という性格上、観光振興という視点からの言及はない。また地元観光協会の動きを見ても、パンフレット類などは石見と比べても遜色のないほど充実しているのだが、ややもすると総花的で、テーマを持って複数の地域を結びつけるという視点が(とりわけ産業観光に関して)弱い。合併前の旧市町村や観光協会内の各支部の連携が十分に図られていないのではないかと危惧される。
- [7] 2009年8月の新潟交通佐渡の時刻表によると、たとえば午前中に「史跡佐渡金山」を見学して13:36発のバスで宿根木に移動する場合、その到着時刻は16:14になる。この間、

バスの乗車時間は103分で、待ち時間は51分である。つまり、バスが時刻表通りに運行されたとしても、移動時間の3分の1は待ち時間に費やされるのである。

- [8] 注6の「提案書」には「各資産を結ぶシャトルバス等を利用した積極的な公開を実施する」と書かれているが、2009年7月末現在、いまだ実現しておらず、運行ルートも不明である。
- [9] その後2009年4月に、世界遺産登録推進のための部局は、世界遺産推進課として教育委員会から本庁総務部に移された。

参 考 文 献

- [1] (財)東北産業活性化センター(編):地域の文化資本,日本地域社会研究所,2007.
- [2] 塚原正彦, アンダーソン, D., 土井利彦訳:ミュージアム国富論,日本地域社会研究所,2000.
- [3] 上山信一, 稲葉郁子:ミュージアムが都市を再生する,日本経済新聞社,2003.
- [4] 小笠原喜康, チルドレンズミュージアム研究会(編著):博物館の学びをつくりだす,ぎょうせい,2006.
- [5] 武田竜弥(編著),他10名:日本全国産業博物館めぐり,PHP研究所,2008.
- [6] 須田博, 徳田耕一, 安村克己:新・産業観光論,すばる舎,2002.
- [7] 須田博:産業観光読本,交通新聞社,2005.
- [8] (社)日本観光協会全国産業観光推進協議会(編):産業観光100選,交通新聞社,2008.
- [9] 武田竜弥:日本の産業博物館の現状と課題,日本感性工学会論文誌,Vol.8, No.4, pp.1179-1184, 2009.
- [10] 武田竜弥:感性への社会的アプローチ,感性工学研究論

文集, Vol.6, No.2, pp.67-72, 2006.

- [11] 日本感性工学会感性社会学部会(編):感性と社会,論創社,2004.
- [12] 新潟県観光動態調査(2009年8月6日確認).
<http://www.pref.niigata.lg.jp/koryu/>
- [13] 島根県観光動態調査(2009年8月6日確認).
<http://www.pref.shimane.lg.jp/kanko/>
- [14] 仲野義文:世界遺産石見銀山を歩く,山陰中央新報社,2007.
- [15] 佐渡市教育委員会世界遺産・文化振興課,新潟県教育庁文化行政課(編著):黄金の島を歩く,新潟日報事業社,2008.
- [16] (財)佐渡博物館(監修):図説佐渡島歴史散歩,河出書房新社,1998.
- [17] 澤村明:世界遺産登録が地域にもたらす影響,橋本博文(監修),佐渡を世界遺産に,新潟日報事業社, pp.105-117, 2007.
- [18] 大原一興:エコミュージアムへの旅,鹿島出版会,1999.
- [19] 大原一興:前掲書, pp.15-16.

武田 竜弥(正会員)

1989年東京外国語大学ドイツ語学科卒業。
1991年東京都立大学大学院人文科学研究科修士課程修了。1992年東京都立大学人文学部助手。1995年名古屋工業大学工学部専任講師。現在、同大学院工学研究科准教授。

2002年日本感性工学会に感性社会学研究部会を設立、同部会長を務める。2003～07年日本感性工学会理事。2007～09年同評議員。2005年著書『感性と社会』にて日本感性工学会学会賞(出版賞)受賞。